

り、人によって異なる見解もでてくるので、その定義にかなりの比重をかけるのが普通である。またある程度定義づけられた Taxon を解析することから逆にその定義が変更される場合もある。そこで手段と目的が混同されることにもなるのだけれど、分類という操作と Taxon の持つ性質を説明する目的とは別のものである。分類の言葉がそうであるように、著書にでてくる類型や規格も私の理解とは異なるらしいように感じられる。他人に解るようにものを書くというのは難しいものである。

この本の中には著者が専門とする農学の中からの興味ある多くの問題が紹介されている。専門外の植物分類学の引用例の中には、取り上げて議論するものどうかと思われるものがあるが、著者が専門外であることからすればやむをえないかもしれない。用語の内容を正確に吟味して、農学の事実の中から問題を発展させれば、さらに意義のある問題提起になると思う。

余談ではあるが、著者の学名のつけかたに対する理解は主に動物学での方法であって、植物学での理解が欠けているのではないと思われる。このままでは読者に誤解される恐れがあるので解説を付け加えておきたい。この本では学名の付け方を次の様に説明している。亜種は種の中で大きい変異が遺伝的に備わった集団で、小さい変異は変種であるとしている。亜種は遺伝的特色を持ち、他の亜種と互いに隔離して生活する集団と規定される。変種は亜種に見られる生態学的システムと異なり、単位集団の中に見出される変異でゾーンプールに帰属するものと見なされるとしている。ただ一つの亜種の中にさらに特色を持つ小集団がでてくることがあるが、現在ではそれには名のつけようがない。こうした第二亜種、第三亜種ランクを設定する必要があると述べている。これは大体動物で行なわれている命名の方法だと思う。動物学と植物学とで命名の方法が異なることは知られるところである。植物では動物の亜種に当るものを総て変種として扱ってきた。それは De Candolle 辺りに始まり、Bentham, Hooker, Engler と次第に完成されてきた方式である。

最近に変種だけでは Taxon の実態を的確に表

現しえないという考慮から亜種概念が導入されてきた。しかしこの導入がまだ新しいこともあって、亜種の扱いは人によって異なり共通の規定ができていないのが現状である。一般的に言えることは、種の中には集団としてよく纏まり、あまり変異の認められないものもあれば、多数の変異集団があって分類の難しいものもある。多数の変異集団を抱える種については、大きな特徴で分類する遺伝的にも地理的にも異なる集団を亜種とし、その分布範囲内でさらに遺伝的にも地理的にも区別する小集団を変種とするのがおおよその亜種、変種の扱いである。この場合植物で言う変種は中尾氏の言う第二亜種に当る。中尾氏が定義した変種は植物では品種に当るものであろう。亜種と変種をどのようにランク付けるかの技術的な問題があるが、最近の詳細な種間、種内分析の手法からすればそれほど面倒なことではないであろう。植物学ではこのような扱いが大筋だと思うし、動物学での学名方式より、より実体に適合した Taxon を表現できる点で優れていると思う。しかし動物学の方式にならう人が増えているのも事実である。ヨーロッパの学者にその傾向が強い。生物には同じ基準で学名が付けられるのが望ましいが、性急に行うのは混乱を起すだけである。(山崎 敬)

□田澤伸雄編著 北海道昆布漁業史 414pp. 1990. 私費出版。

北海道における昆布漁業の歴史を扱った書で、徳川時代、明治時代、大正・昭和前期(戦前)および昭和後期(戦後)のそれぞれの時代において、昆布の生産状況、保護と増殖事業、漁家の経営・経済、昆布製品の流通・経済等がどのようなであったかを資料を中心に述べている。徳川時代初期に本州から渡来した人々が北海道の交易独占権を得ることにより本州との主要交易品として昆布の採取が盛んになったこと、当時の昆布採取は太平洋沿岸が主で、日本海沿岸やオホーツク沿岸では行われなかったらしいこと、中国への昆布の輸出は既に1600年代初期(徳川中期)に行われていたことなど、興味をひく記述が随所にある。昭和38年に降絶えることなく続けられるソビエトとの貝殻島周辺の昆布採取に関する協定、その頃行われた

第二貝殻礁の造成、後に昭和50年代に行われた貝殻島代替昆布造成事業等の経緯を示す資料からは、恵まれた昆布漁場を失った戦後の北海道の苦悩が読みとられる。豊富な資料を駆使した労作である。巻末に昆布漁業史年表が31頁に亘って掲載される。私家版であり、希望者は下記に連絡のこと。

〒060 札幌市中央区北7条西11丁目 田澤伸雄。
なお著者は北大・理・植物学科出身の海藻学者である。
(千原光雄)

□ Farjon A. : *Pinaceae. Drawings and descriptions of the genera Abies, Cedrus, Pseudolarix, Keteleeria, Nothotsuga, Tsuga, Cataya, Pseudotsuga, Larix and Picea.* 330pp. 1990. Koeltz Scientific Books, Koenigstein. ¥34,800.

世界のマツ科のマツ属を除く総ての属と種類の総説であって、各属の相互関係、亜属、節の分類、各種類の検索と記述とがあり、各種類の全形図と球果や葉を付けた枝、葉が描かれ、種類ごとの分布図がつけられている。また、巻末に葉の横断面の図が付されている。

マツ科を Abietoideae, Laricoideae, Piceoideae, Pinoideae の4亜科に分類し、この中 Pinoideae は *Pinus* として単行本で1984年に出版されているので、今回の出版によってマツ科全体の纏めができたわけである。日本のマツ科も総て記録されている。今まで報告されたマツ科の総纏めで、ほぼ最終的な結論と言ってもよいほどに纏まった本である。注目されるのはモミ属の分類系で、この属は従来から色々な分類系が提唱されているが、日本の種類の類縁関係をたどると、殆ど納得のいかないものであった。新しいものでは Tang-shui Liu の *Abies* (1971) の大著があるが、その分類系には問題があるようにみうけられた。

今回 Farjon が提唱している分類系は、日本の

モミ属で見ると、ほぼ納得のいくものである。それによると、シラビソはトドマツと共にアジア大陸に類縁の種類がある。オオシラビソはシラビソとは異なり、北アメリカの *A. amabilis* Dougl. ex Forbes が近縁であると言う。ウラジロモミは中国西部の *A. recurvata* Masters に類縁があると言う。シラビソはアジア大陸に類縁種があるが、1種類だけかけはなれて北アメリカ西部のアパラチア山脈に分布する *A. fraseri* (Pursh) Poir. も関係があるとするのは面白い。日本の森林を構成する主要な樹種の類縁関係が明らかにされることは、日本の植物相の解明には欠かせない。シラビソとオオシラビソのアメリカ大陸での類縁種との関係は、ホツツジとミヤマホツツジのアメリカ大陸での類縁種との関係(本誌 63:121, 1988)によく似ていて、同じような分化の歴史を持つことを想像させる。

なお、イラモミ(マツハダ)の学名は日本では *Picea bicolor* (Maxim.) Mayr の学名が親しまれているが、*P. alcoquiana* (Veitch ex Lindl.) Carrière が正しい学名であることは、H. E. Moore が1966年に主張したことで、それを繰り返して主張している。日本で *P. bicolor* が使われているのは、日本の裸子植物を纏めた Mayr (1890) が学名の選択を誤ったことに依る。*P. bicolor* の方が使い易い名であるが変更せざるをえない。白沢保美、H. Mayr、E. H. Wilson、草下正夫、林弥栄氏等の研究によって、日本の裸子植物はほぼ明らかになってきた。然しまだ幾つかの疑問は残されている。マツ科でもシコクシラベ *Abies veitchii* var. *sikokiana*、シラネマツハダ *Picea alcoquiana* var. *reflexa*、ヒメマツハダ *P. shirasawae* は分類が十分に確定しているとは言えない。これ等を明らかにするのは日本の研究者の責任である。

(山崎 敬)